

宋虎一巻

永登9
1460



叙

竹のたけこりし流華極楽軒
 のゝ偶然ガウゼンとて予が書意
 一書。終日杯と把くけり
 酒。他碎ふこころを和す法の
 一書。然るおと平電覺して
 嘆く。曰。呼喚子。業ふ心こ
 一書。こころや。おとら。其せら。こ日
 虎のときと。終るる。たけこり
 九此書と。おしひ。あめ。ひ。ひ
 とり。糺サキ糺サキの。あ。乃。こ。こ。所。く。所

於て商賈建毒業の温奥ウヅカク、夜こ
 つてえん。恨くく。は。泣く。ふ。帳中。お
 秘して。永く。毒業の。居イと。感カ
 る。と。曰。是。子。あ。あ。の。み。ま。の。こ
 何ぞ。せ。よ。公ラホヤケ。す。り。こ。ま。ん。曰
 子。強アヤク。り。倉。廩。室ニミチ。を。礼。節。と
 知。り。衣。食。足。り。く。業。辱エイシヨク。を。と
 一書。い。ひ。ふ。必。居。ま。ら。ぶ。ま。こ。こ。り
 あ。い。ふ。ら。や。山。々。少。事。ま。こ。こ。け。く
 世。を。お。し。補。ひ。た。し。と。せん。や。他
 第。一。回。子。が。麻。衣。稱ホウニヤク。を。書。し。知

善政所の致はぬり
解るるもあはれ同細おるに
るがそふあさうんそとを
うまふれぬく書肆
又英園に投紙

寶曆丙子中冬

東武 牛林子後



必用八本虎之巻

一 元米商の徳高貴冠る
子不穀や生民の天祿るれば
日利をまかりぬめて大ひなり
所以也さき徳園の津津米
を引交しきくのはの工を
はたしきく下も貴いさき
かねば身一に垂てえとく
天道自然の理かまうせり
ことと別欲さき志るべし
ことと我輩の海は信む
細くは懐合高秘り

心未果商しる人の持論
の類は斯くもなす、他は
評判のたつことを見くは
杯原田の意あり一門又
入るべくせんぞ文書の
死を疑ひ知らんや

一 本意とちがひ天性自然
乃理をつめざるべし其地
批乃理と考へて一途に
実を交わすて商致は
よのこは物を商賣の
て毎日市場に主を初と

つ子或は入船或は船を風
松ふ耐を以て人をもつ
毎日下りてくるはた
毎日の因ふ縁は
史を道に他割りの
意を文法にお考て

一 互に満ちると欠き
福の地なる有餘と欠
と陰陽の行の及に
おろしきとれん
つくして又
言下りて考ふ

の同陰陽のたよなるもの
たうか又穀の多きと穀
みよるものも人を知る
一途のちか下せたること
外に陰を人の氣が陽に
進しんむむつつめめつつ時しの陰
事ことて陰いんをを進しんむむつつめめつつ時しの陰
又陰いんをを進しんむむつつめめつつ時しの陰
ままつつめめつつ時しの陰
月げつの遠ちん時しのちかひを
ああつつめめつつ時しの陰
理りははつつめめつつ時しの陰

この豊凶を中令化割
令割豊凶を極め最さい陽
氣きをを進しんむむつつめめつつ時しの陰
るる何なに程ほど大風吹ふくく又また
いう極ごくののちかひを
の豊凶極ごくの時ときをを進しんむむつつめめつつ時しの陰
又陰いんをを進しんむむつつめめつつ時しの陰
ああつつめめつつ時しの陰
の豊凶をを進しんむむつつめめつつ時しの陰
るる豊ほう凶きゆうのちかひを
ままつつめめつつ時しの陰
をを進しんむむつつめめつつ時しの陰

お利をばらさるゝと云ふに
てお合陰にともむさうま
向ひよりハま行へく
るうあまもあこあ
なり終るお終べー
一程一陰して陰と下りい
極きの弱き切おきて下り
よのく程ハ陽ふのやりつめ
ト知より陰ふちを放し太
陰陽を口へお持し
一ふひ入高仕けをいふは
程とすくちく仕子けは程

おひ合我う絢合ひつそれ
より丈夫仕子けをい
まさめしともおまのやう
ふくまは可なりさう合せ
しうくあといさぐだうに
太化割々舞列陰陽のた理
とんぐへ毎々映沖
なくおけりて天乃の
る海おはした時おり合
りのとあうらうはちあ十人
おかおひよりさ時ハそ
握ぢいらるゝの又人

おひつゝとて時へて後ぞひ
りくしとてけり理をよて
毎月お背^{そむ}ぐて致し外の
りやちんはてまうかす大
こふあり。た理の事、だ
はいく日く存とおまら
毎言け書を考へ終るえ
こらあてりつりま、ここの
外へ、^よ讀む時をこらあて
くり又強^{ツク}く時へりま
ゆけこらえまて終りぬ
一月中のお場くは中

のくせとてん垂てりり初
お初回をりりりりりり
ありとてりりの方終也又
あまとしてもたはひぬ
ゆら

一月八書^ちよきけり六
まぞさくふこより極思
まごもてりりりりりり
こらまよりりりりりり
替りりりりりりりりり
八書ハ本道^ちの八書あり
下のちたよて成る

一 甲子年寅の日...
 是年壬寅の日...
 日ごうりの...
 一 五日より...
 あさあおりの...
 毛口改...
 もくせすく...
 久んかく...
 一 乃の存...
 又...
 乃日...
 たりり...

一 事...
 一 甲子...
 中の人の...
 是...
 一 甲子...
 又...
 日...
 よう...
 一 甲子...
 一 甲子...

ありまきぞらうぢらこ又
外の日いすべて甲子初
言終ほ庚申の初安粒握
強し甲子まきくとうる下
ともこを南産ぞらう庚
申へたたく初あまこ他
甲子へ陽をねども陰
越くもさる庚申の陰を
まきた陽の氣をうあり
を庚申へ毎ふ休日申
次の酉の口と庚申乃
お陽とらり申酉

二日体の対い成の口とそ代り
よれたり之れこの体日へ
知進不り申子の口と
登より日より登る初
心を付るるべし初を
互々進へ登よりあり
又初あまれ登る者
一庚申の秋つる申の陽
のうらう庚申陰の表と
うて陽のうら陰のうら
及び他一庚申の口と
らうら初甲子た下初

一 二季の波屋に西の日はあ
る夜に遠く大風ふくま
も一あある時不表と
舞ひうへい日とを伴と
する波屋に風をくはへこ
とひ秋小風あささくも
まうひこたうりあうひと
くひがんの内の風おをま
付えううり子修秋乃
むぐん七日の也一日も
ありくうりまうりあは
作あまるとあはへま

一 正月を冬より去る時
時酒米買りりりりり
おゆ八七八あへる巻腹の
存とあうりあまあま
さうらあまあま
一 ふさがりあへまうりあ
米ららあまの
一 二月八日あまあまあま
十日あまあまあまあま
あまあまあまあまあま
不精あまあまあまあま
あまあまあまあまあま

一 一季の定季と二季の殺し二
季と二季の九存あるは二
残りしより有るは或は
安んずるは秋を九りし
破るは二季安んずるは
つらきむすりのお堀
ふやうとささりのけり
こつとやうしを地獄白の
遠く一毛ささるは
とあるをくさくへお堀
二季よりつらく二季
同終ると持合りつら

二 二季の定季と二季の殺し二
季と二季の九存あるは二
残りしより有るは或は
安んずるは秋を九りし
破るは二季安んずるは
つらきむすりのお堀
ふやうとささりのけり
こつとやうしを地獄白の
遠く一毛ささるは
とあるをくさくへお堀
二季よりつらく二季
同終ると持合りつら

お福同存あ々もて来道
 へちまの表表たる物へ
 一 同存と同あまはへに化ちり
 室内にすくく言ふあま
 へに化ち秋より来りり
 途へあまちりり
 一 又六り極外の時を以て
 秋へ中法も法もしりり
 一 又六り又食つるあ
 一 ありり法よりを以て
 ありつり風ふくま
 秋へ中法も法もしりり

冬立おぬしを西より
 冬くがくつてあく風
 一 又中風らそそくつり
 冬へ秋ふりり西天ち
 一 又中表西のとりへ秋
 ひよりりりり
 一 又りりりりりりりりり
 中法りりりりりりりりり
 中の所りりりりりりりりり
 必化ありりりりりりりりり
 ちるりりりりりりりりりり

つまひにおぬる戸は六日の
四ノ世の口有るくもをき
まつおく初るく秋風三戸は
くし方のとこは志進る戸
くをまあるは秋風三戸
るすしちをそつしんぬん
んをさおそくくもをきおく
く時へ化あくくもをき
の口あるは六日ある戸は
くんちあるは六日ある戸は
く世世の口とこは三戸は
るし世の日の世の刻る

初て秋風あき戸あし
六日の口あるは六日ある戸は
ちを化あるは六日ある戸は
戸は土用一日とて秋あつ
とつしちあるは六日ある戸は
一六日の口あるは六日ある戸は
化ああくくもをき
つぶぬりくもをき
せんまあるは六日ある戸は
色ありくもをき
る戸は六日あるは六日ある戸は
くくはくもをき

へんをわし〜く〜但〜と
 あり〜あ〜く〜さ〜と
 入のぬ〜う〜と〜げ〜と〜
 用よ〜う〜に〜さ〜と〜
 ふう〜と〜時〜は〜と〜
 一 丑の日はとちぬ〜
 二 乙の日はあ〜と〜
 三 丙の日は世〜の〜初〜の〜
 四 丁の日は接〜ひ〜
 五 戊の日はとちぬ〜
 六 己の日は〜
 七 庚の日は〜
 八 辛の日は〜
 九 壬の日は〜
 十 癸の日は〜

一 六の日のさ〜
 二 乙の日は〜
 三 丙の日は〜
 四 丁の日は〜
 五 戊の日は〜
 六 己の日は〜
 七 庚の日は〜
 八 辛の日は〜
 九 壬の日は〜
 十 癸の日は〜

三ヶ年とらんくへりこと
秋三ヶ月お陽盛れ七月八月
あく又八月より九月あさ
時を仕とお陽あささそを
坊又七月より九月あさ
時お換りさ結とらんく
一 ち月お母の日有とて秋
風も有し時八九月あさ
とらんくおけり換あさ
もそと時八九月あさ
代りねさくあさあさ
一 葉木大着人の積りさ

十年からあ米並段を伴置
多味とてさこの化と割合
高りたりのさささささ
ささ十分とて後及味
七か作ちささ七かと日安
お直り後と味と割合
よ人のさささを考を替り
一 おりへりささささ
月下垂るる時八九月
の善悪を考へらるる
けりささ

一 七月天 葉 次

八月八日米柳ヶりし他乃
積り松子のあつて七日
八日土での四ふふあつて天
井車屋おるりのあり
一九月の者体むだり、徳國の
松子ふふのより車屋ふ
定おれはさうりごとく他
東西の米あつてまた六日
比こりあつるあり
一十月、新米あつて初りこ
く他の者あつてより何く
ふえさる車屋あつて又豊

年海化のといあつて
中あつて供へる車屋
あつて中へあつてあつて
さる海化のといあつて
一十一月、丸洲まのあつて
く賣出さるる車屋あつて
さる海化のといあつて
りし車屋あつて
一十二月、実垂とてあつて
あつてあつてあつて
一世の中、あつてあつて乃

在患股と知るものこん

せんの中一あり

一豊年の凶凶凶凶の
考きききききききき

一在股せんか中凶之割
無き垂に成るりハ米減じ

しつる右う形くもさうさく

一天井患股へ天七の年法へ

併一米減せぬ四に天井

患股ある時ハ必りあへ

たて井の縁せんか秋化

新米のねせんか合く

括みりりきき後ハさかきも

りあへお堀股くとりり

きききききききききき

二三日のえ時ハを新せん

合らうのあてさうりあはし

とあはだき

一股くくさうり時さ患股

お合の時ありりりりりり

又股くとりりりりりりり

さうの下地を長し居るさ

候すもせだ中くさるす

ハ多竹あはし押圓あへ

くろくくいのねり

一 中園米^{ツネ}をうりてすくまき時

ハ正下よりは子なる垂辰也。

是必之存法也。ちのちちち

又破換^{てん}取^りし事ありてハ

なる垂辰也。ちのちちち

る事ありてハ

一 水谷の他^たを思ふより東園

よりおぼしき事ありてハ

一 高の利^り分の時^{とき}は七^{しち}の

ちちちちちちちちちちち

ちちちちちちちちちちち

一 雲りり六りりりりりりりり

あつたつたつたつたつたつた

三月六日ありては三月十日

小倉^{こくら}にちちちちちちちち

ちちちちちちちちちちちち

一 五月六日とちちちちちちち

ちちちちちちちちちちちち

一 六月七日とちちちちちちち

ちちちちちちちちちちちち

ちちちちちちちちちちちち

ちちちちちちちちちちちち

ちちちちちちちちちちちち

一日でりしゆめいしゆめいの時
 中道にありて中へあり
 一人の愛人そこのめい
 一二日お合たりと一昨日より
 舟に乗る人なりしそゆめい
 舟の底に大板下りのお
 崎ありたりしそゆめい
 京の町へそゆめいと人れむ
 了ふ終りて終りにありて
 とこの町へそゆめいとあり
 一市法ふたりとそゆめいとあり
 時へりゆめいとありてあり

親類ちのちうとんせうめい
 主としてありありありあり
 一ト之を分るるありありあり
 中へこりてありありありあり
 一立お替りお物ありありあり
 右手はととありありありあり
 下りてありありありありあり
 一とんせうめいそゆめいとあり
 舟の底に大板下りのお崎あり
 接文とありありありありあり
 一とんせうめいそゆめいとあり

三月ふ 買あき月
 四月ふ 大田の
 七月ふ 茶あらし
 九月ふ 雲方あり
 十月ふ お酒あり
 十一月ふ この品よよる
 十二月 仕舞おゆに於て
 買方さつとあらしよく
 買ふなりだ
 一 米ささげ月の大概
 九月 新米いぬき
 十月 七歩 ささげ

十月 ちか ささげ
 十一月 いかささげ
 十二月 大田の毎に換或遠い
 ちかく 世田月ささげと
 米のささげと考へ
 中米積りふふたねを
 大田の米 認めお入
 くととを考へ下り
 一 けちり 賣
 けちり 買
 後之 賣
 後之 買

天井を塗りし

戸を塗りし

右六ヶ条ふらま

一、三日の間に古米を

多く津軽米新加

買方六ヶ利あり

京大坂の郡米

ねむいう給言

戸を塗り

一、乳ふ商のい

とくハ賣米

とくハ買米

子あつたのし

一、七日の間に

米を

時を

一、九月の間に

とくハ

かう

とくハ

一、十月の間に

かう

時

必ず

一 世時よりハハシ儀買一戸と
 二 日向も買一戸 松之を
 ののをとりかこしゆく考
 一 西の目ふ吹風ハ必大風ニ成
 とらしゆく考
 終をせしゆかす今
 一 曆の日の悪日方あつた
 方とせも入りの下
 小方時を時分のおたは
 南の座を座出する
 一 つちのへを射す
 つちにおおゆらぐり

一 ともへつちの入か
 人時方日より下つち
 より又より何りさげ
 づちの日のみえつち
 ともへつちより
 一 天一と六入におゆけ
 ともへ八日のるあへ
 くれむ日のつち
 一 八ちも太回
 一 不成物
 二七 二日 十一日 十九日 廿七日
 二八 二日 十日 十八日 廿六日

三九 朔日九日十七日 廿八日
 十四日 十五日 廿日 廿八日
 又十一 又日 十三日 廿日 廿九日
 六十二 六日 十日 廿二日 晦日
 半の夜日ハ大あゝりてう
 のふ成日ハ大方下う志し
 てこのふ成日ふらう時ハ
 此群てハ下りのし
 半のふ成日と下り時ハ此係
 るハらうおしを半のふ
 ぬらハ此係つととととと
 Pののこお又ふ成日ハた

付ききとこの時ハ言をふせハ探
 目ふじ又おく此行ハ時ハ
 同ハ此之但ハ厚底の不友日
 大下りあ是ハを厚中の不友
 日ハ此下りてととととハ此
 一確ハハとととととととととと
 是時ハ言遠ハまけはら
 是とととととととととととと
 必来一たハはははははははは
 未之換とおしとむ里ハハハ
 きと付とんやうするはハ換
 するおし毎友者との心見

切し一色ハ改ニ候事ナラレ
 一者仕りける時先換結とあり
 べし後梅とさくは候也
 一たといハお物必堂とあり
 きしといひるがうらんをせ
 長の時よりくの無候とあり
 支分もろろふまじり買事な
 きしといひるまじりひん
 立のまじり賣ふ事つてあり
 もちり以時買ふ事とあり
 あり賣つる事ありのあり
 必堂とありかろと大換也

一の買おく事とあり
 又合あり一月と買はし
 うねの賣つる事あり
 必堂おね下つとあり候
 下つ候と買つるもた候
 あり候
 一おね下賣也時地を
 大こよよとあり又さ
 時の色は大ふりあり
 一地震うらありの
 四つに賣り事七の面に九ハ
 六ツハフ時入つとも見也

一かきかき接みのさる下すを記
のこのさるお場とよく考へし
りくさびもかきさるはこ
とふのさるいさるさびと
りく食すれば接みか切跡
おろり接みのくさるはこ
おろり接みのくさるはこ
このおろり


あよけいひでんひのさる
諸家秘傳日取白


相傳のさる—ごまろりのおろり


一四九 朔日九日十七日廿二日
二四九 二日十日十八日廿六日
二二七 三日十日十九日廿七日
四三八 四日十二日廿八日
五三八 五日十三日廿九日
一六一 六日十四日廿一日
七五十一 七日十五日廿一日
八五十八 八日十六日廿四日


己と

一七曜の星のくりにあつたのち
 しくくをこころよち日曜の
 日曜の星とこころの星の
 しくくをこころよち日曜の
 二日曜の星とこころの星の
 しくくをこころよち日曜の
 三日曜の星とこころの星の
 しくくをこころよち日曜の
 又たへ五日六日とくりに
 ①の所をこころよち日曜の
 しくくをこころよち日曜の
 しくくをこころよち日曜の

七正

 賣也し
きかおあ
きかおあ


八二

 おあおあ、あは

九三

 買也し
きかおあ
きかおあ

十四

きかおあ
きかおあ

十一

 安し

十二

きかおあ
きかおあ

乱

子辰申

け日ハらんともさこれとて
あさ日おんこり付のさ
へまつてい御しをさ
大なりあつ付ハ映お大なり
あさあははをまて大なり
あさ内もけこつちあなり

病

丑巳酉

け日ハて塔のをきりか入る
あさくあて映あさなり
りあなり

水

寅午戌

け日ハ海のうーりりあ
のさなりあなり

火

卯未

け日ハ天地のうーづり日
あさなりあつてさ
けなりさ御し家なり
あさ内もあさなり

一宿年乃事

年の初日ハ則宿年之
申の初日の月ハ十一日
戌の初日の月ハ廿一日
右の口ハさ下必あ
一記丑のさ

辰の初日乃月ハ十日也
午の初日の月ハ廿日
申乃初日乃月ハ晦日
丙の初日の月ハ廿九日
傳ハるの初日乃月ハ大の
月ハ廿九日とありい
あさ口ハさ下必あ

正五 九 罽馬 罽馬 罽馬 罽馬 罽馬

二六 馬 祿馬 祿馬 祿馬 祿馬 祿馬

二七 祿 罽 祿 罽 祿 罽 祿 罽 祿 罽

四八 馬 罽馬 祿馬 罽馬 祿馬 罽馬 祿馬
大の月ハ二より小の月
ハ下より上くるなり

馬 言下平ニクセア

罽 言下キ

罽 言下平ナリ

祿 言下ア

罽 大言下あり言下地
言下く言下く

祿 言下言下 必片祿
言下あ言下女

言下ニ言下ク
ハ

甲乙 三木 小風 四木 大風

丙丁 五火 海産のふく 接ふ

壬癸 六水 山あり 水とつあぐ

戊己 七土 海へいして人死む

庚辛 八金 金をいして争ひま

三木と云ハ甲乙の勢ハ三ノ月
つ火と云ハ卯辰の勢ハ三月
七土と云ハ未申の勢ハ三月

○新撰六十圖注

海中金 三ノ月ノ初メニ
おちりていふ

爐中火 三ノ月ノ初メニ
おちりていふ

大森木 三ノ月ノ初メニ
おちりていふ

路傍土 三ノ月ノ初メニ
おちりていふ

鋭鋒金 三ノ月ノ初メニ
おちりていふ

山頭火 三ノ月ノ初メニ
おちりていふ

洞下水 三ノ月ノ初メニ
おちりていふ

三ノ月ノ初メニ
おちりていふ

城頭土

新つー

白磁金

さつろくさけかこびど
まよー

楊柳木

午の日ほよー
未の日よー

井泉木

つらいたんまろせえこし
申こさけせはるこあー
申こ安々れはるこさー

屋上土

おとそごつろりか
さまーさつろりまよはし

霹靂火

入日よーつろり子の目
つろりれを母の目首と司る

松栢木

まにめえくさつろりまよを
おろはさ面でのまろ

長流水

あつろりとあふぶーろり
あつろりもこさけろり
ろりろりろりろり

沙中金

砂の中の金と目ふまあ
くまよみろりろりろり

山下穴

かすろりろりろりろり
よろりろりろりろり

平地木

さつろり成の日ろりろりろり
ろりろりろりろり

壁上土

ろりのちんかろりろりろり
のろりろりろりろり

金泊金

ろりろりろりろりろり
ろりろりろりろり

覆燈火

り灯の穴の板よものろり
けろりろりろりろり

天河水

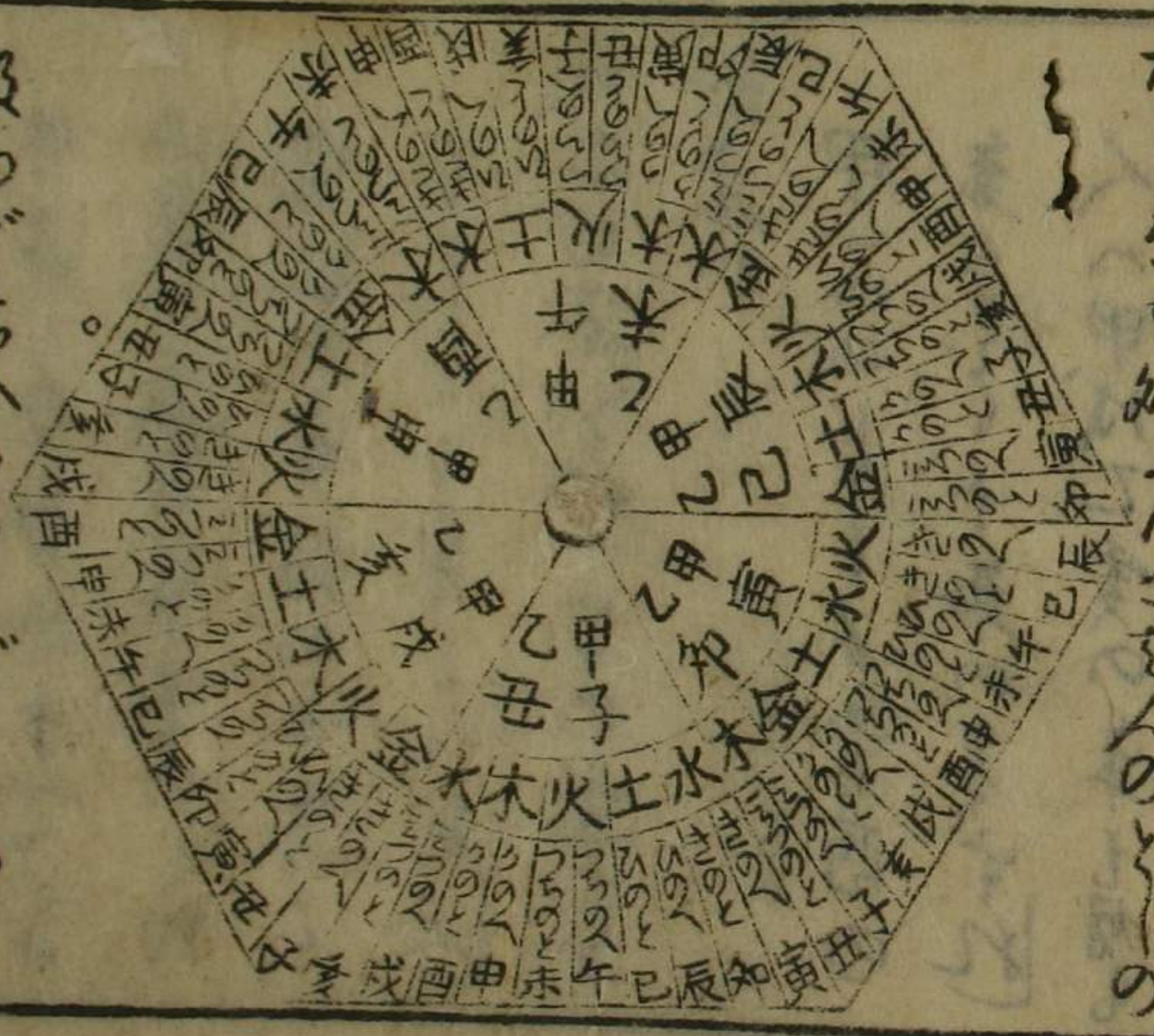
水ハ初ころりろりろり
けろりろりろりろり

大驛土

ろりろりろりろりろり
ろりろりろりろり

天上火 <small>つらの上</small>	汝中土 <small>ひのしんち</small>	大溪水 <small>このへん</small>	棠柘木 <small>このへん</small>	劔劍金 <small>このへん</small>
女波男波人のあはれ <small>世るのをもと</small>	女波男波人のあはれ <small>世るのをもと</small>	女波男波人のあはれ <small>世るのをもと</small>	女波男波人のあはれ <small>世るのをもと</small>	女波男波人のあはれ <small>世るのをもと</small>

○空亡日時之事
空亡の時



空亡の時
空亡の時

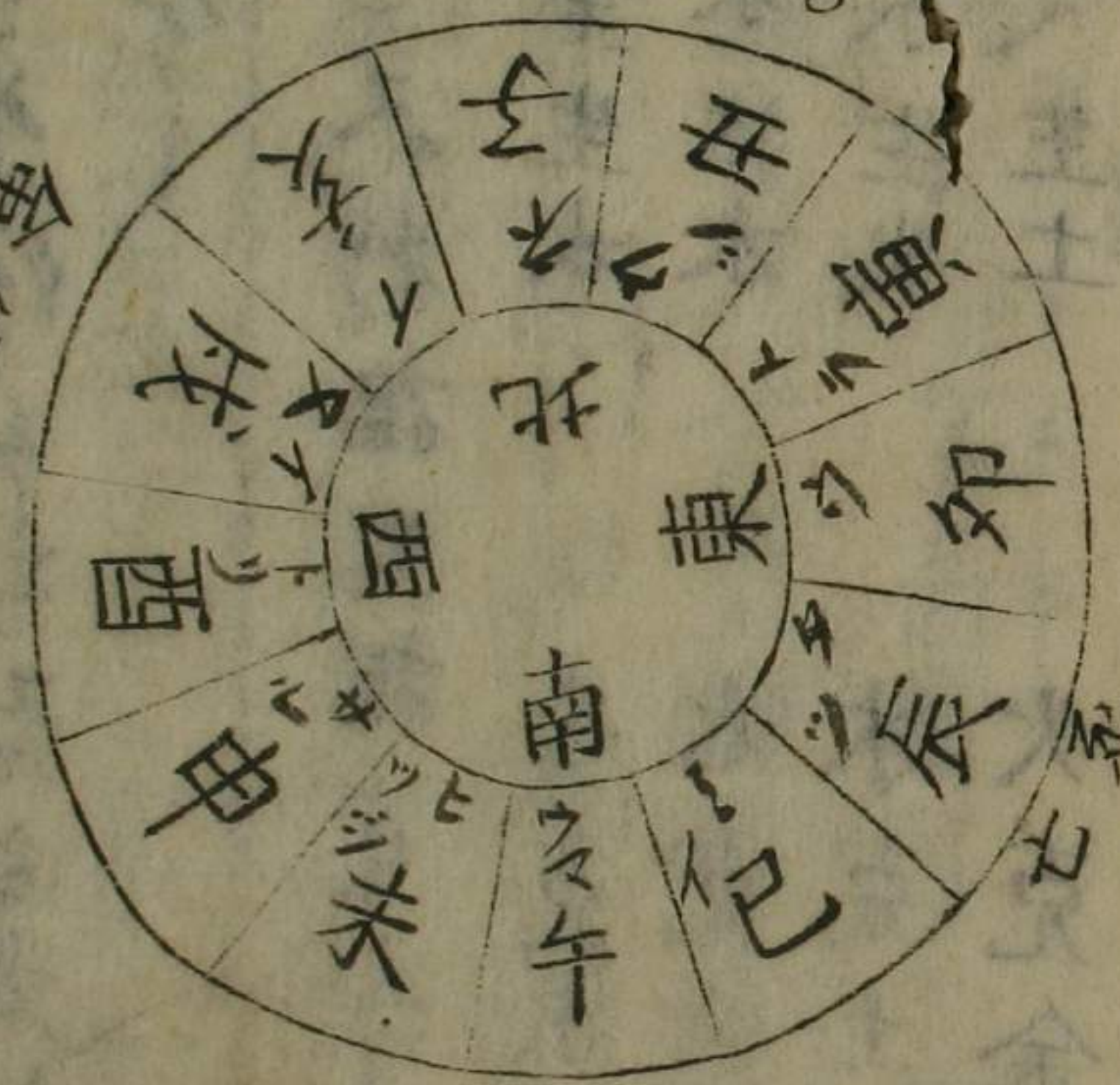
おやぢあんなり
 知え人の生
 引つるは空亡の時

空亡の時と空亡の時を
知るべし

甲子より癸酉まで十日
のつらへ毎日戌亥のとき
空亡たり毎の十日づつ
もつらへなごころへ知るべし
又空の時と一生の空亡と
知るべし

甲子のときと癸酉の
年まじり十年のつらへ
くへ甲戌乙亥の年も
口と時と一生のつらへ
知るべし

○死亡終命日



空の時と空亡の時を
知るべし

丑の日と戌の時
死亡終命日

志の家のいしく何の口
 てもあふとも実あめよ
 あふり何いあしくとあふ
 志の志持くえ見いりあふ
 ともあ何くもあふ考知
 だ

○又仍相生相克

金生水	金克木
水生木	木克土
木生火	土克水
火生土	水克火
土生金	火克金

跋

昇昇の対面商賈皆を市
 藏と称ふまふ不難難結固
 救万人各も氣と確で難い
 集場あれば客の利をばん
 と怨者只怨むる二軍各あて
 孤向あふし困て今世も
 心の業を執る考へ司念利
 わたしと云るは只お庭を
 して無問然高の階ハ匹丈夫

慶功を授けて元帥ふむの志を
 可い授けの意をく天啓の
 神佛の感
 應をうけくあまのこゝろ
 なるは市人家と貞子孫
 永く富と保の秘伝ありと
 八木虎三と号するは又
 あり

流業 狸虎軒

正	三	五	七	九	十一
朔日七日を十日十日 十四日十五日十六日 廿五日廿六日廿八日	朔日二日三日四日 十六日廿一日	朔日一りあると 十六日 廿八日	七日十日終り 十六日 廿四日	五日及び十日と 十三日十六日廿二日 廿五日 廿七日	八日十六日廿四日 廿七日
二	四	六	八	十	十二
朔日初年日十八日 十六日廿二日 廿八日及び十九日	八日十六日十七日 廿八日及び廿九日	朔日七日十六日十七日 廿二日廿四日廿五日 廿六日	朔日十八日 十六日	初日のこゝ十日終り 十六日と 廿日	朔日十三日 廿三日及び十四日

宝曆七丁丑正月吉日

書林 山崎金兵衛
 大坂 拍原屋佐兵衛

以外三季はひえの八中 日 庚申

八木交易書板行目錄

一 八木虎之卷

一 八木豹之卷

一 卜易通商考

一 增補易通商考

一 日用商八卦

一 商人万年曆

一 八木相場帳

一 同追考

一 賣買出世車

一 八木宝の市

一 八木天眼通

一 商家秘錄

